

筆狩師エリナ

奴隸人形の学園

小説 筑摩十幸 挿絵 こうきくう

立ち読み版



第一話	華麗なる筆狩師
第二話	裏切りの再会
第三話	惨華
最終話	Beginning of the End

登場人物紹介

Characters



みさき

岬エリナ

カリスマ的な人気を誇る美少女モデルにして、エリート退魔師。伸縮自在の筆を使った退魔／召喚術で刃々牙と闘う。



かめん おんな

仮面の女

AAAが入手したメモリーに収録されていた映像の美女。エリナはその姿に母の面影を感じるが…？

まだらめ

斑目ジン

人外の存在“刃々牙”のひとり。極細の妖糸を操る力を持ち、人の命を踏みじめることに悦びを感じる冷酷な男。

みさきしん じろう

岬真二郎

エリナの父親で、退魔組織AAAの司令。孤児だったまどかをAAAのエージェントに育て上げる。



かぶらぎ

鍋木まどか

退魔組織AAAの少女捜査官。性格・運動能力はどんくさいが、情報処理能力に優れるメガネの幼児体形少女。



「うう……」

気がつくときエリナは地下牢のようなどころに監禁されていた。幸い着衣に乱れはないが、両手は背中で手錠を嵌められている。

「ここは……礼拝堂の地下なの……?」

重厚な石壁はどす黒く、脂が染み込んだような独特の湿り気を帯びていた。それはおそろくここに監禁された何百人という女たちの痕跡だろう。今にも石の隙間から女たちの悲鳴が聞こえてきそうだ。

「気がつきましたか、岬エリナ」

「！」

斑目が鉄格子の向こうで嗤っている。その横には気をつけの姿勢で立つ母の姿があった。ビデオで見たまっ赤なランジェリーと仮面を着けている。

「羞恥心と闘争心を忘れて欲しくなかったのですね、服はそのままにしておきましたよ」

地下牢に入ってきた斑目が、いやらしい目つきでまどかの身体を見つめる。人を人とも思わない、商品を見るような眼だ。見られるだけで何十匹ものナメクジが這い回るような嫌悪感を感じた。

「それはどうもありがとう」

キッと睨みつけるものの、武器を奪われ後ろ手に拘束されていては、ほとんど抵抗でき

ない。

「さすがエリナお嬢様だ。自分の母を手にかけるだけのことはある」

イヤミっぽく頬を歪め、那海を手招きする。那海はどこか遠くを見るような表情でぼんやりと立っており、あの時のような邪悪な気配はない。

「バンヴォーラのプロトタイプは肉体の保持に重きを置いており、このように老けることもなく、当時のままに美しい」

たわわな乳房をいやらしく揉みほぐす。熟れた乳脂肪を包む白い乳肌は、十代の乙女のような張り肌と肌理の細かさを維持している。

「その反面、情緒面の制御は不安定で、いつも思いのままというわけにはいかない。今はこの仮面で補っていますが、これでは面白みに欠ける」

どんなに身体をまさぐられても那海は反応を見せない。あのビデオやエリナを襲った時も、そのように操られていたということなのだろう。

「我々は気づいたのです。真のバンヴォーラには永久に壊れない強靱な精神の持ち主が必要だと。そこで貴女が選ばれたのですよ」

縁なし眼鏡がキラリと光り、蛇のように先割れた舌が、薄い唇を舐め上げる。

「それは光栄ね」

虚勢を張るものの、内心は穏やかではない。人間を生きた人形に改造する。そんな恐ろしいことが可能なのか。しかし目の前の哀れな母の姿を見せられては信じざるを得ない。

何しろ心臓を一突きにしても平然としていたのだから。

「しかしあまりに強固な精神は改造に不向きです。そこで貴女の母親に手伝ってもらおうことにしました」

パチンと指を鳴らすと、スイッチを入れたように那海の瞳に光が宿った。

「ウフフ。エリナ、会えて嬉しいわ」

「マ……お母様……」

優しい声をかけられて、懐かしさがこみ上げる。だが騙されてはいけない。今の母はエリナの知る母ではなく、操られて動いているにすぎないのだ。

(でも……)

頭でわかっているけど、心は掻き乱される。しゃべり方も微笑みも以前のままで、失われた時をあとと言う間に埋めていく。

「あなたには教祖様の素晴らしさを知ってもらいたい。そして私と一緒に聖天宗に帰依しましょう」

「何を言っているの！ そんなことできるわけないじゃない！ あんなイボガエルみたいなやつ！」

「新しいお父様に失礼よ、エリナ」

激怒する娘を諭すように囁きながら、ゆっくり近づいてくる。急接近する胸の谷間から懐かしい香水の匂いが漂い、それを嗅いだエリナの脳裏に幼い頃の母との記憶が蘇って、

ますます混乱させられた。

「お、お父様って……何を言っているの」

「教祖様は私と再婚してくれると約束してくださいましたの。そしてぜひあなたを家族の一員として迎えたいと仰ったわ」

「な、なんですって!？」

あまりのことに全身の血が逆流し、天地の感覚が失われるほどエリナは混乱させられた。「あの化け物と結婚するために私を……!? そんなこと、絶対認めるもんですか！ お父様はどうなるのよ！」

「あんな退屈な男のことなんか忘れたわよ。だって教祖様のオチンチンは奥の奥まで届いて、私が一番感じるところをたっぷり可愛がってくださいさるの。そして最後はお腹の中がまっ白になるくらい、精液を注いでくださるのよ」

それが本心なのか操られているのか、仮面に隠された表情からは判断できない。

「パパを裏切るようなこと言うなんてっ！ うう、やっぱりあなたはお母様なんかじゃない！」

脳裏に蘇ってくる猥褻な映像を振り払うように頭を振る。母のあんな姿は二度と見たくない。

「あなたも教祖様のオチンポを味わって女の悦びを知れば、きっと私の気持ちがかかる」
「私はその風にならない。あんな化け物に屈服するくらいなら死んだほうがましよ」

「昔のエリナはもつと素直ないい子だったのに。やっぱり片親だとよくないのね」

アップにした髪から細い棒状のモノを抜き取る那海。それはエリナから奪った筆だった。
「さすがいい筆ね」

「う……まさかそれを……!？」

筆は現実と虚構の壁を取り払い、無から有を生み出す。さらに人体に作用し、能力を引き上げたりもする。それを悪用されたらどうなるか、その力を知っているだけに、激しく動揺してしまう。

「そうよ。あなたの身も心も淫らに造り替え、その状態で永久に固めてしまうの。素晴らしいお人形さんのできあがりよ」

唇を窄めてフウツと筆先に息を吹きつけると、穂先がルージュと同じ朱色に変わった。

「お母様がこの筆の力で徹底的に躡けてあげるわ」

軽く筆を一振りすると、天井から黒い紐が降りてきて、エリナの手錠に絡みついた。

「放しなさいよ！ あんたのことなんか、もう母親だと思っただけだから！」

両手を後方に吊り上げられて強引に立ち上がらされる。さらに両脚も床から生えてきた黒紐に絡みつかれ、肩幅に開いた状態で固定されてしまう。腰を曲げお尻を突き出した惨めな格好だ。

「まずはここから調教してあげるわ」

背後に回った那海は制服のスカートを捲り上げる。淡いピンクのショーツが露わになる

が、それもすぐに膝まで引き下ろされた。フィットネスと鍛錬で磨かれた臀筋がヒップをツンと吊り上げ、見事な曲線を描き出している。母のような熟れはなくとも、適度な脂肪が少女らしい初々しさと健康美を醸し出していた。深い谷の底には可憐な一輪の花が息を潜めて佇んでいる。

「可愛いお尻ね。でもお父様に気に入ってもらうにはもっと淫らにならないと」

娘のアヌスを覗き見て那海はうっとり微笑んだ。淡いセピア色の肛門は放射状の皺を深く刻んで収縮し、注がれる視線に震えている。まだまだ生娘の硬い蕾だが、いずれここも男を知って開花していくのだと思うと妖しい昂奮で筆先が震えた。

「やめてお母様！ な、何をする気なのっ？」

モデルとして視線を浴びることに慣れている、排泄器官まで見られるのはやはり恥ずかしい。腰を振って逃れようとすけれど、母の手に押さえられ、ピクリとも動かさない。その間にも赤い穂先がピタリと押し当てられ、妖しい紅を塗り込んでくる。

「うあっ……っ、冷たいっ！ つくう！」

皺の一本一本をなぞるように、穂先は丁寧に蠢いてエリナの肛門を排泄器官とは思えないほどふしだらなモノへと変えていく。

「ウフフ。中にも塗ってあげるわ」

アヌスにズブリと筆を突き立てられ、エリナは悲鳴を上げてしまう。どんな陵辱や拷問にも耐える自信はあったが、まさかこんなところを責められるとは思っても寄らない。

「うっう……そんなことしても無駄よ……くうんっ」

筆は染み出る紅を潤滑剤にして、クルクルと回転しながら奥へ奥へと侵入してくる。細い筆とは思えないほど、お尻で感じる圧迫感は大きかった。

生まれて初めての肛瘡に蓄はキュッと窄まって異物を喰い締めるが、侵入を防ぐことはできない。それどころか、紅を塗られた肛門粘膜からくすぐったいような奇妙な感覚が湧き起こり、エリナを混乱させる。

(なに……この感じは……?)

深く挿入された筆が直腸内で暴れ回り、腸壁に紅を染み込ませる。次の瞬間にはスウツと引き抜かれ、排泄感にも似た刺激を肛門の内側に塗りつけた。

「無駄だつて……ンあつ……言ってるのに……もう、やめなさいっ！ ふぁうあつ」

筆を往復されるたび、失禁してしまいそうな搔痒感とくすぐったさに、懊悩させられる。初めは冷たかった筆先もジワジワと熱く感じられてきた。

(お尻が……お尻の中が……熱くなって……)

穂先に腸内を舐められるたび、ビリビリと電気にも似た甘覚が満ちてくる。電流は腰椎を駆け上がり、背筋を異様な痺れでゾクゾクさせた。

「これでああなたのお尻はとつても感じやすくなつたわ。オマンコと同じくらいにね」

「はぁう……なんですつて……はううんっ！」

筆をチュポンと引き抜かれ、思わず変な声が出そうになる。確かに那海の言う通り、肛



門は異様に敏感になっていた。

「母親にアナルを責められて随分色っぽい顔をしますね。もう感じているのですか？」

「ち、ちがうわ……こんなことなんでもないし、お尻なんかで感じるわけないでしょっ！」

口では拒否しても、母の手で責められたアヌスはズクンズクンと疼き、括約筋が弛緩して力が入らない。下半身全体が甘く痺れてしまい、両手を吊られていなかったら、へたり込んでいただろう。

「しっかりと定着したようね。その紅はもう一生とれないわよ」

ピクピク震える蕾はさらに赤みを増し、ぼつてりと充血している。まるでゼリーを煮詰めて造ったように柔らかそうで、プルプルと震えながら艶めく紅を光らせている。排泄器官とは思えないセクシーな色気が匂い立ち、陵辱者たちの眼を楽しませた。

「さあ、休んでいる暇はありませんよ」

斑目が正面に立ち、ズボンを引き下ろす。美人母娘の色香に刺激されたのだろう、ペニスは鋭い仰角で立ち上がっていた。

（あれが……男の……）

モデルの現場では異性の裸を見ることも希にあったが、勃起状態の男根を生で見るのは初めてだ。赤銅色の剛棒は二十センチを超える長大なモノで、飛び出たエラなどは、毒蛇を彷彿とさせる。さらに全体がヌメヌメした粘液に包まれて、不気味さに輪をかけている。「準備はいいみたいね。さあ、斑目様にお尻でご奉仕するのよ」

「お、お尻でって……」

「肛門で私のチンポをくわえるんですよ。処女は黄様に捧げるのでね」

背後に回り込んだ斑目が眼鏡のレンズを冷たく光らせる。剥き卵のような尻タブをつかんでグイッと押し広げた。

「なっ?! そんなの気が狂っているわっ!」

黒髪を振り乱しイヤイヤと首を振る美少女筆狩師。セックスは愛しあう男女の愛の営みであり、享楽のために、あまつさえ排泄器官を使つての行為など信じられなかった。

腰をロデオの馬のように跳ねさせて必死に肛虐から逃れようとするのだが、見事なくびれ腰から続くお尻の蠢きはセクシーダンスとなつて斑目を樂しませてしまう。

「さすがはトップモデル。いい尻だ。これは仕込み甲斐がありそうですね」

「お尻でなんて死んでもイヤよ! 無理矢理したら舌を噛み切るんだからっ!」

エリナは全身の力をお尻に集中させ、徹底抗戦を主張する。燃えるような赤い瞳が、斑目を肩越しに睨みつけた。だがそれは刃々牙の残虐嗜好を煽つただけだった。

「舌を噛んでもすぐに黄様が治療してくれますよ。奇跡の力でね」

ガキッと腰を押さえ込み、鋭く熱い切っ先をアヌスに押し当てる。

「うあっ! やめなさいいつ! ンあああ~~~~っ!」

括約筋を拡張してくる挿入感筆とは比較にならない。丸太の杭を打ち込まれ、身体を真つ二つに裂かれていくようだ。

「クリトリスを肥大化させて一時的にオチンポにしてみたの。これで奉仕の悦びを教えてあげる」

「あきやあああんっ！」

ギョツと握られてエリナははしたない悲鳴を上げてしまう。クリトリスの快感を何倍にも増幅したような鋭い快美に鼻先で赤い火花が散る。しかもその快感は深く、身体の奥底の魂にまで直結しているかのよう。軽く握られているだけで、逆らおうという気力が萎え、足腰の力が抜けてしまうのだ。

「これは愉快じゃ。親子愛の具現であるかな」

「あらゆる嗜好に応えるのがセックスドールの務め。より多くの客から愛を受けることができるでしょう」

狼狽^{うた}える美少女退魔師の姿を見てほくそ笑む黄と斑目。勝ち気な娘が美しい母にクリペニスを責められ悶える様は、妖しい背徳の耽美に満ちている。

「ハアハア……うう……き、客つて……」

「教祖様に奉仕することだけがお人形の役目じゃないの。大勢の人間や刃々牙の殿方に身体を捧げ、頂いたお布施を教祖様に貢ぐの」

「そ、そんなの売春じゃない！」

黄や斑目だけでなく他の男にまで犯されると知って、エリナは黒髪を逆立たせた。一流の退魔師でありトップモデルでもある自分が、見知らぬ男を相手に身体を売るなどあり得

ない。

「バンヴォーラになれば、永久に黄様のためにお布施を集めることができるの。なんて幸せなのかしら」

「いやよっ！ 私は絶対そんなことしない！」

清楚だった母から売春の指導を受けるなど、胸が張り裂けそうになる惨めさ。しかもそれが宿敵黄に貢ぐためなど、屈辱以外の何物でもない。

「オチンポの気持ちよさを知れば、あなたも奉仕の悦びがわかるはずよ」

軽くしごかれて「ヒィッ」と喉が軋む。母の掌の柔らかさと温もりが背徳感を掻き立て、それがまた未知なる快感を目覚めさせようとする。

「うああ、それに触らないで！ ああああんっ！」

腰から力が抜けてガクンと両膝をつく。膝立ちになったエリナの眼前に黄の巨根が突きつけられた。

「いやっ！」

あまりの不気味さに顔を背ける。刃々牙は人間を遥かに超える精力を持っており、その男根が与える快楽も想像を絶するという。目の前の剛棒が母を狂わせたのだと思うと、引っこ抜いてやりたい衝動に駆られ、背中で握った拳がブルブル震えた。

（今なら……）

ペニスに噛みつけば、殺せないまでもいくらかダメージを与えることができるだろう

か？ そんなことを考えていると――。

「早くお父様のオチンポをおしゃぶりしなさい」

「いやよ、そんなこと絶対しな……きやああつ」

フタナリペニスの包皮をグイッと剥かれ、激烈な刺激が脳幹に突き刺さる。剥き出しにされたチェリーピンクが母の視線を浴びて、恥ずかしそうにピクピク震えている。

（これ……すすすぎる……）

生まれて初めて味わう牡の快感。その荒々しさと心を惹きつける強い吸引力に目眩めまいを感じる。これまでひたすら受け身で快楽を与えられてきたけれど、クリペニスによって沸き起ころのは、積極的に自ら快楽を求めようとするケダモノじみた欲求だ。

「ウフフ。オチンチン大きくなってきたわよエリナ。ママにシコシコされて感じちゃったの？」

「そ、そんなことないわっ！ それに触らないで……触っちゃダメだってあつ！」

動揺を悟られたくなくて大きな声を出してしまったが、それはむしろ動揺してますと宣言しているようなモノだった。

「ママがお手本を見せてあげるわね」

那海は仰向けになってエリナの脚の間に頭を入れてきた。当然恥ずかしいクリペニスは、吐息を感じられるほど母の唇に接近する。

「あ、ああ……いやよ！ ママ！ そんなことしちゃダメえ！ ああああつ！」

嫌がっても陰茎の根元を握られてはほとんど抵抗できない。長く突き出された舌が亀頭を下から持ち上げ、赤いルージュに濡れた唇が上からゆっくりと覆い被さってくる。

「うあああ……そんなあ……あ、ああつ、だめつ、だめえええつ！」

スッポリとくわえ込まれた瞬間、エリナは電撃に撃たれたように背筋を反らせる。

一晩中こつてり母娘レズで責められた時の数倍、いや数十倍もの背徳感がこみ上げ、同時にその背徳感と表裏一体に感じていた妖しいときめきも、何十倍も大きくなっていた。

(こんな……恥ずかしい……つ)

柔らかく温かい母の唇に包まれ、鋭敏な亀頭表面をくすぐったいような痺れが駆け回り、中心部にはジーンと身体の奥底にまで響くような疼きが突き抜ける。肉棒が硬度を増していく一方で腰はグニャグニャになって力が抜けていく。

「ほれ、よがってばかりじゃ修行にならんぞ」

黄の芋虫のように丸々した指が黒髪に差し込まれ、エリナの顔が股間に引きずり込まれた。

「う、うああ……ああう……むうんっ！」

逆らうこともできず、エリナは黄の異形巨根を強引にくわえ込まれてしまう。噎せ返るような異臭が口腔から鼻に突き抜け、嘔吐感で胃液が逆流しそう。

(うう……か、嘔みついて……)

嫌悪を怒りに換えて、エリナは綺麗な歯並びを剛棒に突き立てようとした。だが……。

「歯を立てるなんて、一番やってはいけないこと。もっと優しく丁寧に扱うのよ。こんな風に……」

巧みな舌技を駆使して、クリペニを責め立て、娘の反抗を許さない。

「あ、ああうんっ！ ひやめ……ああはあぁんっ」

亀頭の傘の周囲や鈴口の上辺りを舐められると、強烈な快感が肉棒から恥骨、そして腹の底にまで届く。そして何か得体の知れないどす黒い波動がジワジワと大きくなってくる感じ。その黒い波の正体を知りたいような知りたくないような、奇妙な葛藤がエリナの理性を蝕んでいく。

「ほらほら、もつと舌を使うんですよ」

横に回った斑目がニヤニヤしながら命令する。その手にはビデオカメラが構えられている。た。

「んんっ！ ぷはぁっ！ こ、こんなところ撮らないでよっ、変態！」

「黄様は帰依する前の反抗的な姿を見るのもお好きなのですよ。特に貴女のように気位の高い女はギャップが楽しめますからね」

「グフフ。完成したらAAAのお前の父のもとにもディスクを届けてやろうか」

「うう……そ、そんなことしたら殺してやるっ！」

犯されるだけならまだしも、痴態を記録に残されるのは一生の恥だ。しかもその姿を父に見られるなんて、死んだほうがマシだった。

「無駄口叩いてないで、ご奉仕なさい」

娘を叱るように、那海の指がアヌスをズブリと貫く。

「あつぐう！ お尻はダメえ！ あふうつ、むふうんんつ！」

斑目と那海に開発された肛門はエリナの急所の一つだ。細い指一本を挿入されているだけで背骨が震え、骨盤が溶け崩れてしまいそうになる。

「んちゅくちゅ……ほら、早くするの」

「ンあああううつ！ んふつ、くちゅ、じゅつ」

さらに鈴口にも尖らせた舌先がねじ込まれ、灼熱の快美が交錯する。そして凶暴な何か、クリペニの根元でドロリと蠢動する。

(な、何が起こってるの……?)

正体はわからないものの、それが決定的な破滅をもたらすであろうことは本能的に感じ取れた。

(とにかく……早く終わらせれば……)

最悪の事態を避けようと、エリナはオズオズと巨大肉棒に舌を這わせ始める。

「んっ……んっ……むう……ちゅ、ちゅばあ」

ムツと押し寄せる濃厚な牡臭と舌を刺すような塩辛くて苦い味に苦しみながらも、エリナは必死に勃起を舐め回す。そのうち紅を塗られた唇から、心地よい刺激がじんわりと広がってきた。

(く、唇が……こんなに敏感に……)

紅い唇が灼熱の亀頭と触れあうたび、ウズウズと舌の根が疼き、甘い唾が湧き出す。目の前の太く遅しいモノをもっと口全体で味わってみたいという異常な欲求が膨らんでくる。「おおお、なかなか上手いではないか」

もちろん初めてのエリナに技術などあるはずもないが、母が直接教えてくれているお陰で、上達は驚くほど早い。裏筋や鈴口の上など巧みに急所を刺激するあたり、今後の成長を期待させて、異形ペニスはますます硬度を増していく。

「表情も色っぽくていいですねえ。ククク」

「ううっ……む……くちゅ……やめ……ああん！」

(こんな……退魔師である私が……汚らわしい刃々牙のモノをくわえさせられて……その姿を撮られるなんて……)

もしネットに流出すれば、モデルとしてもおしまいだろう。カメラの冷酷な視線に羞恥を煽られ、エリナは惨めさに今すぐ舌を噛み切りたい心境だ。もちろん巨根に口を塞がれていては自害できるはずもない。エリナにできるのは、一刻も早く黄を満足させこの淫虐な遊戯を決着させるだけだ。

「んふっ。そうよ、上手よエリナ……次は吸引よ……んふっ……ちゅば、ちゅばあっ！」

那海が頬を窪ませて、柔らかく濡れた粘膜をクリペニスに密着させてきた。

「んあああんっ！ そんなに吸わないでえ……ひゃうっ……ビクビクしちゃうっ！」

激しく吸引されるたび、ツーンツーンと背徳の快感電流が尿道の中を駆け下り恥骨に落雷する。荒れ狂う牡の衝動が、少女の倫理観も羞恥心も嘔み碎き、それらを糧にしてさらに大きくなっていく。

「これ、さぼるなど言っておろうが」

「んぶぶっ！ あううんっ……ちゅっ、くちゅん」

頭を押さえつけられて、逞しい肉杭に喉奥を突き上げられたエリナは悔しげな苦鳴をくぐもらせた。窒息しそうな息苦しさで悔しさに切れ長の二重の端に涙が浮かぶが、奉仕をやめることも許されない。さらに母に責められるクリペニスもジリジリと地熱を高め、おぞましい被虐の頂上を目指して一歩ずつ登らされていく。それは射乳させられた時と似ていたが、それよりも遥かに激しい衝動だった。

（ああ……何かが……来そう……もう、早く……早く終わって……!）

すっかり余裕もなくなつて、エリナはがむしゃらに巨肉棒を吸い舐めた。唇の快感と疑似ペニスの快楽とがリンクして、自分で自分をしゃぶっているような錯覚を感じてしまう。（あ、ここが感じて……ううん、ダメよ、しっかりしないと）

盛んに瞬きする瞳もトロンとして、いつしか没頭したように黒髪を揺らしながら、窄めた唇を往復させる。鼻の下が伸びたタコのように無様な顔を撮られているのは惨めだが、気にする暇もなかった。

「んちゅ、その調子よ。ウフフ、エリナもやっと黄様の素晴らしさがわかってきたようね」

「んはああんツ……ちがうの……私はそんな……あああ」

「オチンチンこんなに大きくして、オマンコも濡らしているクセに。ママの目はごまかせないわよ。ちゅっ、むちゅん」

バキュームフェラに加え、シュツシュツと手コキまでしてエリナを徹底的に追いつめる。その間もアヌス調教の指が抜き差しを繰り返し、その快楽電流が恥骨の裏側に届いてクリペニスを感電させる。

「お、お尻はもうやめて……はああはあっ……そんなにされたらあ……ううう」

「ほら、ここから出したいんでしょ？ 熱くてドロドロしたモノを……」

「あ、あああっ！ 出したくなんか……ない……ママ……もうそこはあ……」

ビリビリと走る激感にペニスを貫かれエリナは惑乱の悲鳴を振りまく。那海の口の中で疑似男根がピクピクと脈打っているのが自分でもわかる。その間隔が徐々に早まっていることも。その先に一体何が待っているのか……。

「んふあっ、出さない……じゅば……ハアハア……ぜ、絶対に出してたまるもんですかあ……あ、ああんっ」

未知なる射精の切迫感に混乱したまま、エリナの舌は母の技を見事に反芻する。カリヤ裏筋をチロチロくすぐり、滲み出る生臭い牡蜜も丁寧^{ほんとう}に舐め上げてしまう。

「フフフ。積極的になってきたな。実の母親にフェラされながら、儂のチンポをおしやぶりして悦んでおるとは、随分淫蕩な血が流れておるようじゃ。これは徹底した浄化が必要

じゃのう」

ペニスをしゃぶる母娘の顔はやはりよく似ており、交互に見比べれば母娘同時に奉仕させているような優越感がこみ上げる。

「バンヴオーラの素質は十分かと思われませう」

斑目に顔をアップで撮られてカアツと頬が灼けるが、口淫奉仕は休まない。

（これは終わらせるため……敵を欺くためよ……でも……こんな脈打って……ああ……すぐく熱くなってる……）

ペニスに同じ快感をフィードバックされているせいで、黄が昂奮していることが我が身のことのように感じられる。切迫した牡の息遣いを聞かされているだけで、身体がどうしようもなく火照ってくる。

（ああ……もうすぐオチンチンから……アレが……精液が……出ちゃうの……？）

おぞましいはずなのに、想像するだけでクリペニスがジーンと熱くなり、心臓がドキンドキンと狂ったように早鐘を打った。そして黄のペニスと連動するように、エリナのクリペニスもビクビクと脈打ち、熱い塊が筒内に溜まってくる。

「はあ、あんっ……ママ……んちゅっ……もうやめて……それ以上しないえ……くちゅばあ！」

迫りつつあるクライマックスに恐怖がこみ上げる。女とはまったく違う牡の絶頂への道程は、太腿や尻タブなど、身体のどこに力を込めても歩みを止めることができず、一歩ず

つ着実に昇らされてしまう。黄の毛だらけの陰囊から立ち上る濃厚なフェロモン臭も気にならなくなり、むしろかぐわしい芳香のように思えてくる。

「ああんっ……ママのお口に射精だしているのよ。んちゅ、くちゅっ……臭くてドロドロの穢れた白濁を吐き出しなさい」

「んああ……そんな……ママのお口になんて……そんなこと許されないわっ……んあああっ！ だめえっ！」

許されないことだと思えば思うほど、背徳の情感がゾクゾクと燃え上がり、クリペニスは痛いほど勃起し、ヴァギナも浅ましく愛液を滲ませてしまう。溶けた熱蠟のような灼熱の淫欲が、尿道を焦がしながらジリジリと上昇してくる。

「ちゅば……黄様と……新しいお父様と同時にイクのよ、エリナ……くちゅちゅぶ、じゅばあっ！」

「いやあ、絶対に……出さない……出したくない……もうやめ……んむああああ
んっ!!」

一際強く吸引されて、まっ赤な稲妻が疑似男根を串刺しにする。未知なる牡の快感が押し寄せて、脳内はパニック状態、鍛え上げた退魔の術もなんの役にも立たなかった。ワケがわからなくなり、エリナは弓なりに背を反り返らせて、シンクロするように巨肉棒を吸い立ててしまう。我を忘れてカクカクと腰を振り、母の喉奥に相姦肉棒を突き立てていた。「クフフ。いいぞっ！ エリナ、僕の聖液を飲ませてやるぞっ！」



麗しき元退魔師母娘は、艶めく白い肌を密着させ、白蛇がのたうつように妖しく腰を振り、太腿を絡め始める。

「ククク。ついに堕ちたか」

満足げに黄が嗤う。最強と呼ばれた美しい筆狩師を、母娘セットで陥落させたのだと思うと、達成感で胸が熱くなり、感動すら覚える。

「どうやら素晴らしいバンヴオーラが完成したようですね」

斑目もまた眼鏡の奥の細目を昂奮気味に輝かせる。那海とエリナ、それぞれに美しい獲物であり、最高の素材だったが、二人併せて人形化したことで、その魅力が最大限まで引き出されたといつていいだろう。

「あ、ああああん！ ママ……もつと突いて……はあうん……ママのぶつとい豚チンポで……エリナの牝豚マンコ、メチャメチャに犯してえ！ あ、あああんっ！」

「はああっ……エリナ……イイッ……エリナのおマンコ、最高よお……あううん」

息をピッタリ合わせ、二人は禁断の快楽にのめり込んでいく。乳房を寄せて敏感な乳頭をすり合わせたり、ねっとり舌を絡ませあう相姦レズキスを披露したりする。

周囲から注がれる観客の熱視線も気にならない。それどころか、むしろ長大なペニスが出たり入ったりする様を見せつきたい心境で、那海とエリナは腰をくねらせた。

妖しくも美しい母娘の競演に圧倒され、観客はヤジも忘れ、固唾を呑んで見守っている。熱い静寂の中、入札金額だけがうなぎ登りに上昇していく。

「グフフ、どうだお前たちバンヴォーラにされて嬉しいだろう？」

三本のペニスを自在に操って二人を責めながら黄が迫る。

「はぁん……エリナは……パパのお人形に改造してただいて……くちゅ……とつても幸せですう……ああむ♡ パパのおチンポ美味しいのお♡」

「那海も幸せですわぁ……はぁうん……エリナ、お父様のおチンポ独り占めしないで……ちゅばじゅばあ♡」

那海のぼつり柔らかな唇と、エリナの可憐な花びらのような唇が肉傘の上を這い回り、滲み出る牡汁を競いあうように舐め飲んでいく。

「ククク。淫らな牝どもめ」

エリナのアナルの初々しい締めつけ、那海の蜜壺の熟れた温もり、母娘四つの乳房と二つの唇で愛撫される優越感……どれをとつても超一級品で、それら様々な快感が、二人を完全に屈服させたという悦びと相まって、至高の昂揚感を与えてくれる。

これから半永久的にこの美人母娘の肉体を堪能できると思うと、これまでの長い人生でも味わったことのない昂奮がこみ上げてくるのだ。

「はぁはぁあぁ……ああ……あなたぁ……もう……我慢できません……お願いです……だ、出させて……ああ……射精させてくださいませえ……はぁん」

射精を封じられている那海が限界に達し、悩ましい視線を肩越しに送る。

「ほほう、娘の膣内に射精したいというのか？ エリナを孕ませたいというのか？」

「あ、ああ……そうですわ……はああ……エリナの中にい……あああん……射精したい……
…いっぱい、中出ししたいですう……あああん……この相姦好きの変態豚チンポでえ……
ハアハア……娘の子宮にい……種付けしたいですわあ」

淫欲の炎に新たな油を注がれたように、いつそう激しくピストンを突き上げた。移植された牡豚の過激な性欲に支配され、那海の瞳がギラついた光を放つ。

「ひやううん、ママのがあ……ズンズン響くう」

「あああん！ 出したい、出したい、出したいの……エリナの中にい……おおうん……
エリナを孕ませたいのおっ！」

愛液の雫を撒き散らしながら、娘の蜜壺を犯し尽くす。腰を回すようにうねらせ、卑猥な告白をエリナの子宮粘膜に淫呪として書き込んでいく。

「お前はどうか、エリナ。孕まされたいか？」

「あああん……は、はい……ほしい、私も欲しいですう……！」

母のふしだらな願望を直接子宮に上書きされ、エリナもまた禁断の相姦妊娠願望と牝豚の浅ましい生殖本能に目覚めさせられていく。

「はああ……ママのオチンポミルク欲しい……いっぱい……いっぱいママのミルク、エリナの牝豚子宮に注ぎ込んで欲しいの……はあん……相姦マゾのオマンコに……ママの赤ちゃん妊娠させてえ……はあうん♥♥」

膣壁をいやらしく波立たせて、母の肉棒を喰い締める。そこからもうすぐ精が噴き出す

と思うだけで、背徳の愉悅に子宮がキューンと疼いた。

「お前たちは実の親子、血の繋がった母と娘なのだぞ。それでもいいのか？」

プリプリしたエリナの若尻とムチムチした那海の熟れ孔に、同時にピストンを打ち込む。背徳感と快楽を同時に味わわせ、二人の身体に相姦の魔悦を刻み込んでしまうつもりなのだ。そうなれば互いが枷となり、母娘は永久の奴隸人形となるだろう。

「はいパパあ……親子だからあ……血が繋がってるからあ……気持ちがいいのっ！」

「ああ……赤ちゃんができたらあ……黄様の奴隸人形にしていただけのように……エリナと二人で育てますう」

インモラルすぎる宣言をしながら、二人はドロドロした愛欲の底なし沼に沈んでいく。もはや伝説の退魔師の面影は微塵もなかった。

「フフフ。さあ、思う存分快楽を貪りなさい」

調教完了を確認した斑目が、那海の疑似男根を縛っていたベルトを外した。

「はああああああんっ！ ま、斑目様あ……つくふうんっ……くるう……きますう……で、出るのお……ああん……出てしまいますすう！」

いよいよ迫った破滅の時を目前に、那海はこれまで味わったこともない愉悅に背筋を粟立たせた。全身の血が沸騰して勃起に流れ込み、エリナの膣内で陰茎が一回りも二回りも太く膨張していく。

「お前の溜まりに溜まった欲望ザーメンを、娘の中にぶちまけてやれ！」

クビクと腰椎を痙攣させては何度も射精を繰り返した。母性すらも淫欲に変え、娘の子宮にドクドクと注ぎ込んでいく。

「はああ……エリナア……孕むのよ！　ハアハア、私の赤ちゃんを身籠もりなさい……あうんっ！」

「ンあああああああ！　ママの豚ザーメンおいしい……もつと飲ませて……もつとエリナの牝豚マンコに飲ませてえ……あああ……妊娠しちゃう……これも絶対孕んじやううっ……ああ……ん♡」

母と相姦の罪を犯してしまった背徳感が、爆発的な快楽となってエリナを内側から焼き尽くす。連動する肛門も淫らに戦慄き、黄の勃起をさらに奥深く呑み込もうとする。

「オオオッ！　エリナ、那海！　出すぞおっ！」

究極の征服感に酔いながら、黄は美しい母娘に渾身の精液を撃ち込んだ。

ドピユウウッ！　ドバドバドバアア！

灼熱射精が墮落の烙印となって二人の粘膜に焼きつけられる。

「あ、ああ……んっ♡♡」

大量射精を受けて、感極まった母娘がきつく抱擁すれば、四つの乳肉がギュッと圧縮され、押しくらまんじゅうしながら三本目のペニスを搾り上げた。

「ぬおおっ、こつちもくらええ！」

ビュルッ！　ビュクビュクビュクウッ！

母娘の胸の谷間で剛棒がいなき、噴水のような勢いで白濁を撒き散らす。

「はああつ！ パパのミルクウ……あああん♥」

「あああん、こんなにいっぱい……たまらない♥」

二人は競いあうように唇を寄せて、溢れ出る特濃精液を飲み下していく。だが量が多すぎて二人がかりでも飲みきれず、美貌にべつとりと絡みつき、濃厚な精臭を撒き散らした。

「はああ……はあ……ああん……ママ……エリナ……幸せなのお……♥」

「ハアハア……私もよ……エリナ……あん、ちゅぱ」

生臭い匂いも粘つく感触も苦い味も、二人にとつて至福の味わいだった。互いの顔に粘りつくザーメンを舐め取りあい、やがて恍惚の表情で口づけを交わし始める。母娘の腰が動き出し、再び相姦セックスに溺れていく……。

翌日オークションが終わり、聖天学園は表向き平穏な風景を取り戻していた。だがその地下では、淫らな宴が今も続いていた。

「あああん、おいしいママ……もつと……もつとミルク欲しいのお」

エリナは瞳を淫蕩に煌めかせ、母のフタナリペニスを唇で吸いしゃぶる。今のエリナはあの極端な改造から、髪も瞳も体型もほぼ元の状態に戻されていた。ただ、まるまると膨らんだお腹を除いては。

「んああ……あああ……エリナア……はあん……イイ……ああ、上手よ。いっぱい飲んで



え……はあああん♥」

先端から根元まで愛娘の舌唇にじつくり愛撫され、那海は仰向けの身体を反り返らせる。淫らなブリッジの頂点で数えきれない背徳を犯した肉棒がドクツと精を放った。

淫乱化プログラムにより二人は極限の発情状態を維持されていた。互いを貶めあうことで、正気に戻れないようにする悪魔のようなプログラムだ。

「んっ……ごきゅ……みりゅく……むふう……おいし……んんっ♥」

ドロドロの熱腐精を嬉々として飲み干すエリナ。三つの穴すべてに母の精を何度も注ぎ込まれていたが、まだまだ満足できなかった。

「はああん……ママ、今度は後ろからしてえ。赤ちゃんにもミルク飲ませてえ」

四つん這いになってお尻をクネクネさせると、ポテ腹がタプタプと揺れた。エリナのお腹の中には五匹もの刃々牙の仔が育っていた。魔猿と那海に種付けされたモノだ。遺伝子操作で急速に成長し、もう臨月と言っていい状態だった。最高の美人退魔師母娘の霊力を吸った仔は最凶にして最悪の怪物となるだろう。

「いいわよ、エリナ」

那海も嬉々として娘の背後に覆い被さる。精を放ったばかりだというのにペニスはまったく衰えず、娘の妊娠蜜壺にズブズブと埋まっていく。

「あああん、エリナのオマンコ……すごい……熱くてトロトロで……ハアハア……ああ、ずつと繋がっていたいわ」

母娘は二匹の牝獣になりきって、相姦セックスにのめり込んでいく。もう自分たちが人間でなく、奴隸人形というモノに改造されてしまったことも気にならなかった。これから永久にこの快楽を味わい続けることができるのだから。

「あつ、あああつ、ああああん！ イイツ！ ママのオチンポ、子宮に届いてえ……あああ、たままないのお♥」

ドッグスタイルでの腰の振り方もインストール済みで、∞の形に振り立てる腰が、自分にも母親にも絶妙な快楽を与える。

「ああん、エリナったら、こんなにいやらしいお人形になつて……ママ、とつても嬉しいわ……はあはあうんっ！」

それに応えて那海も背徳ピストンを娘の臨月子宮に撃ち込んでいく。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

激しく肉を打つ音が場内に響き、二人の官能のうねりが螺旋に絡みあいながら上昇していく。

「あ、ああ……ママ……私もうガマンできない……ああん、イキそうなお♥」

「ハアハア……私もよ、エリナ……もうすぐ……出るわよ！ あ、ああん！」

油を塗ったようなシリコン肌を密着させ、母娘はしつかり息を合わせて背徳絶頂の階段を登っていく。赤黒く膨れ上がった母の獣勃起が、娘の子宮の中でヒクヒクと断末魔の痙攣を繰り返した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!